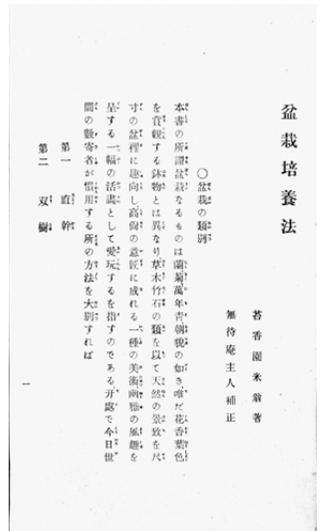


3月

【収蔵品紹介】
木部米吉著『盆栽培養法』
(三銀水石園発行 明治36年)

苔香園園主の木部米吉は、明治41(1908)年に東洋園芸会を組織し、その機関紙「東洋園芸界」で筆を執ったほか、『盆栽培養法』(明治36年)と『盆栽培養法秘訣』(明治44年)の書籍を刊行しました。今回は、『盆栽培養法』について紹介します。

木部は、山形有朋など、多くの政財界人との交流があったことで知られていますが。本書の巻頭にある題字は、陶庵こと西園寺公望の手によるものです。また、著者の木部米吉とともに、補正者として無待庵こと生島一の名があります。生島一は明治39年に刊行された日本で最初の



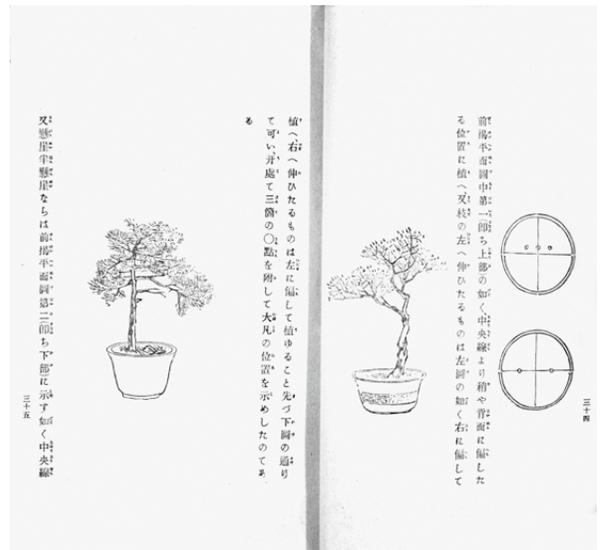
『盆栽培養法』
(三銀水石園発行 明治36年)

盆栽月刊誌『盆栽雅報』の主筆を務めた人物です。本書の刊行に当たっては、木部と交流があった政治家や盆栽界を牽引した人物が関わっていたことがわかります。

本書が刊行された理由は、「近時に於ける盆栽の流行は未曾有の盛況と称せらる、而かも未だ之に関する著書あるを見ず。供養会主加藤三銀之を憾(うら)みとし、来つて予に一書を著さんことを乞ふ、予業務多忙の故を以て固辞すれども聴かず、終に実験の一部分を述説して其需(もと)めに応ず、是れ本書の成る所以なり」と、木部による「自序」に書かれています。注目したのは、「未だ之(盆栽)に関する著書あるを見ず」という一文です。本書が刊行されるまでに、「盆栽」を书名に冠する書籍は、現在判明しているだけでも明治期のものが10点あります(国立国会図書館参照)。しかし、盆栽についての書籍はないというのが、なぜ、このように述べているのか、本文から理由を探ってみます。

だ之に関する著書あるを見ず」と言ったのではないかと推測されます。

このためか、従来の書籍を否定するような文言が本書に見られます。たとえば、用土の項目では、「魚族其性に依て棲処を異にすると同じく、土も亦樹質に依じて大に適否あり、故に世間或は種々の土質を挙示して、其効験を説くものあれども実際は黒土に赤土を混合したるものを用ゆれば足るものである」とい、肥料の項目でも「土と同じく種々の物を挙げて効否を説くものあれども、普通盆栽に



「植替」での植え付け位置の解説

用ひて最も著効あるものは」といって各種の用土や肥料の説明をしています。このことから、本書こそが「狭義の意味での盆栽」の書籍であると考えていたのではないかと考えられます。

なお、本書では盆栽を美術として捉えている点に、もう一つの特徴があります。本書では、盆栽を「活画」と唱えており、この言葉が何度か登場します。最初の見出し「盆栽の類別」では、「盆栽の真趣味は自然の美を顕はす活画たる処に存するのであるから、強ち之を株守するには及ばぬ、実景実物を見、又は名人大家の絵画に依て工夫を凝すが肝要である」と締めくくっています。実際の景色や実物を見たり、絵画を手本に工夫を凝らしたりすることが大切と説いていることから、まさに活きた絵画が盆栽であると捉えていたのでしょう。現在、盆栽が生きた芸術と言われることに通じます。盆栽を美術あるいは芸術として捉える気運は、小林憲雄を中心にして、大正末期から昭和初期に盛り上がりを見せました。既に明治時代に盆栽は美術であるという認識を主張する人物がおり、しかもその人物の近辺には政財界の有力者が存在したという点を考え合わせると、この認識

最初の見出しに「盆栽の類別」とあり、「本書の所謂盆栽なるものは蘭、菊、万年青、朝顔(ママ)の如き、唯だ花香葉色を賞観する鉢物とは異なり、草木竹石の類を以て天然の景致を尺寸の盆裡に趣向し、高尚の意匠に成れる一種の美術、幽雅の風趣を呈する一幅の活画として愛玩するを指す」と書き始めています。明治時代後半の盆栽関連書籍では、自然の景色を表現したものというように盆栽を定義するようになり、本書もこの傾向と同じです。ただ、本書に特徴的なのは、蘭や菊、万年青、朝顔という具体例を挙げて区別している点です。これらの植物は、江戸時代に流行した園芸植物であり、明治20年代までの盆栽関連書籍に登場します。また、その頃の書籍は、江戸園芸の影響が残っていることを本誌2021年12月号で言及しましたが、本書でははっきり盆栽と区別しています。この区別がいつから意識されていたのか、更なる研究が必要ですが、文字としてはっきりと示されている点で、本書は貴重な資料と言えます。つまり、盆栽の定義が異なるため、本書以前に刊行された盆栽関連書籍を「盆栽の書籍」と見なさず、「未

がどのように広がったのか、今後の研究にとって興味深いことを提供してくれる書籍と言えます。

最後に、本書を概観した特徴を紹介いたします。それは、樹種ごとの解説がない点です。本書が刊行される以前も以後も、盆栽関連書籍では、樹種ごとの項目があり、それぞれの培養方法などが書かれています。しかし、本書にはそれがなく、盆栽の全般的なこととして、樹形の説明に始まり、用土や肥料など培養にかかわる内容、植え替えや針金掛けなど技術面の解説を細かく記載しています。また、「拾ひ遣とは彼此乾湿(ひしけんじつ)の度を見計つて灌水するの謂ひである」というように、現在でいう捨水が登場したり、「盆」への植え付けの位置では樹の流れが意識されたものであったり、盆栽棚での保管には棕櫚縄で固定することに言及したりと、現在にも通用する知識が本書の随所に見られます。

このように、江戸園芸の鉢植えと区別した盆栽の定義のみならず、書籍の内容や構成が他に類を見ず、その知識や技術が現在に与えた影響が大きい点で、本書は画期的なものと言えます。

(山館主事 立石見雷)